

前野良沢と『解體新書』

酒井 恒

『蘭学事始』によれば、前野良沢は『解剖学表』（いわゆるターヘル・アナトミア）の翻訳の中心的存在であり、『解體新書』の出版に果たした功績は大きい。しかるに、『解體新書』には次のように書かれ、前野良沢の名はみられない。

若狭杉田玄白翼 訳

日本・同藩中川淳庵鱗 校

東都石川玄常世通 参

官医 東都桂川甫周世民 閱

また、『解體新書』序図の巻の「自序」の翻訳には、少なくとも前野良沢は関与していなかったらしいといわれるが、その理由については、明解な説明は見当たらない。

前者の理由として、緒方富雄は「まず前野良沢の名がないことが注目されるが、これには良沢一流の理由があった

と伝えられている。良沢はかつて太宰府神社の神前で、自分はオランダの術に従事しているが、いやしくも道をきわめずに、みだりに有名になる手段にはしないと誓ったので、玄白が良沢に解體新書の序を求めたときにも、これを理由にこわったということである。」と記し、小川鼎三も「もっとふしぎなのは、前野良沢の名前がここにはないことである。……」

その理由として一般にいわれているのは、良沢がオランダ語を勉強のため長崎にゆく途中で太宰府天満宮に参詣した。そのとき彼はオランダ語の修業が成りますようにと祈り、それは自分の名前をあげるためでないと神に誓った。だから解體新書ができ上って、玄白が良沢に名前をだすことを頼んだとき、良沢は承知しなかったといわれる。

じっさいそういうやむをえない事情があったのかも知れない。：玄白が不十分な訳本でも一刻も早く出版して世にだそうとしたことに良沢はつよい学者的良心から賛成できなかったのであるまいか。それで天神さまとの約束を利用して名前をだすのを断ったのではないか。」と記しているが、両者ともその出典を明らかにしてはいない。

次に、『解體新書』の「自序」は、『解剖学表』の原著者ヨハン・アダム・クルムスの序文の蘭訳文に相当し、杉田玄白が、少なくとも前野良沢が関与することなしに翻訳したものであるといわれている。岩崎克巳は「……此の「自序」の翻訳も亦た、蘭化に無関係とは云へないかも知れないが、……之れはどうしても玄白が本書上梓の直前、その体裁を飾る為め、彼自身の手でクルムスの「自序」を翻訳したとしか考えられない。『重訂解體新書』の「自序」の後に附した玄白の識語は、益々此の推定を確実ならしめる。……『ターヘル・アナトミア』の本文をあれだけ正確に翻訳した蘭化の仕事としては、余りにも似合はしくない、拙劣且つ誤謬を極めたものである。」と記し、小川鼎三は「……つまり前野良沢は本文の訳にあずかり、序文の訳は玄白だけでやったか、すくなくとも良沢が関与しなかったとおもわれるのである。

……この難文こそは良沢先生に訳してもらうべきだったが、なにかの事情でそれができなかったのであろう」と記し、共にその理由を述べてはいない。小川鼎三によれば、良沢は、明和七年、藩主奥平昌鹿のお供をして豊前中津へ

旅をした時、百日間の暇をもらってオランダ語の勉強のために長崎に行ったが、その途中、太宰府の天満宮に詣でて前記の誓いをしている。良沢は、オランダ語にはかなり通じていたと考えられるが、蘭学を志してからの日も浅く、『解剖学表』の本文の翻訳には相当に苦勞したようである。

他方、後藤梨春の『紅毛談』(一七六五)は、その中にオランダ文字が記されていたので、絶版を命ぜられた。この事実から、『解體新書』の出版に対し、幕府がどのような態度をとるか不明であり、良沢は後藤梨春のような結果になることを非常に恐れた。『解體新書』の出版によって、その著(作)者らが処分を受けるならば、良沢の名から藩主奥平侯も何等かの処分を受けるはずであり、また、蘭学者として信頼されていた良沢が、本文の翻訳でも苦勞したのに、「自序」の翻訳で、読解不能部分と誤訳を後世に遺すことは、藩主奥平侯の名を汚すことになるので、「自序」の翻訳には最初から加わらなかつたのであろう。

緒方、小川の説明は部分的には説明できても、「自序」の翻訳に良沢が加わらなかつた理由の説明にはならない。封建時代の主従関係として、良沢が藩主奥平侯へ処分が及

ぶことを恐れ、藩主の名を汚すことを恐れた結果、『解體新書』にその名を連ねず、「自序」の翻訳に加わることを断念したのであらう。本文の翻訳の中心的存在でありながらその名を遺さずにいた良沢は、「自序」の翻訳に加わってもその名を遺す結果にはならなかったはずであるから。また、封建時代の主従関係は当然のことであつたので、『蘭学事始』にも載せる必要がなかつたのであらう。

(名古屋大学医学部解剖学第一講座)

馬王堆出土『陰陽脈死候』の研究

遠藤次郎

『陰陽脈死候』は『十一脈灸経』とともに、近年、馬王堆から出土した医書である。発見以来、『十一脈灸経』の研究はかなりの成果をあげたが、本書の研究はあまり進んでいない。本書は死相を経脈説で論じている。したがって、この書によって、死相を診ることの意義を知り得るばかりでなく、当時(先秦時代～前漢初期)の経脈説をより深く理解できると考え、演者は本研究を行った。本書の内容は、ちょうど『十一脈灸経』がそうであるように、『靈枢』『経脈』篇に発展的に受け継がれている。したがって、「経脈」篇との比較を中心に、本研究を進める。

本書の前半部は三陰三陽経の体系で構成され、次の記述がみられる。「三陽……唯折骨(裂)膚一死。三陰、(腐臈)腸而主殺」。これと同類の文が『足臂十一脈灸経』の中にもあり、「陽病、折骨絶筋而無陰病、不死」とあ